

知的障害養護学校における個別の指導計画 (3)

— 開始年度の観点から —

小 濱 眞奈美 (愛知県立一宮聾学校)
都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)
(2006年10月31日受理)

IEP in Special School for the Mental Retardation

Manami KOHAMA (Ichinomiya School for the Deaf)
Shigeyuki TSUZUKI (Aichi University of Education)

要約 学習指導要領で個別の指導計画の作成が打ち出された平成11年以前から作成していたA群とそれ以降のB群では、個別の指導計画の様式については、学部で異なる結果が出た。個別の指導計画の評価者は、A群の小学部で「担任」の数値が高く平均を上回っていたが、全体的にA・B群に大きな差はみられなかった。評価の頻度について、A・B群に大きな違いは見られなかったが、全体的な傾向としてA群のほうが長めに設定してあった。実態表の作成率は小・中・高等部ともA群の方が高かった。実態表の見直しの頻度は、A群で小・中・高等部ともに「1学期ごとの見直し」の数値がB群よりも高かった。実態表の作成者は、A群で小・中・高等部とも「担当者」の数値がB群と比べて高かった。個別の指導計画の問題点として、小学部・中学部と高等部で傾向が異なる。全般的にはB群の方が問題点としている項目が多い。B群では「担当者の事務負担の軽減」の数値が高い。また、小中学部では「カリキュラムとの関連」でB群の数値が高かった。個別の指導計画の今後の強化点について、小中学部ではA群で「TTの問題」、B群で「カリキュラムとの関連」の項目で大きな違いが現れている。

Keywords : IEP, Special School, Mental Retardation

I はじめに

個別の指導計画は、平成11年度に改訂された学習指導要領において、初めて作成が定められた。しかしながらその運用は個々の学校任せであり、学校間の取り組みにおいて格差がある。

学習指導要領の改訂に先駆けて、東京都(1997)や北海道(1998)は、相次いで個別の指導計画に関する作成マニュアルを発表した。当時の研究の多くはその書式や作成手順に関するものだったが、その後全国的に個別の指導計画の作成が拡大していくのに伴い、保護者との連携、評価、活用、教育課程との関連に研究の焦点が移行してきている。

実態把握もまた個別の指導計画作成において不可欠である。しかし、その内容について、たとえばどんな観点で実態把握を行っていくべきかなどの調査研究はあまり進んでいない。求められているのは、少なくともその子どもの現状、課題、支援の手だてが明確になる実態表である。個別の指導計画における保護者との連携、評価、実態把握は相互に深く関連し合っているといえる。

本調査では、全国の知的障害養護学校を対象に、個別の指導計画におけるこれらの項目に重点を置き、現状の把握と今後の問題点を明らかにする。

今回は、開始年度から分析を行なう。学習指導要領

で個別の指導計画の作成が打ち出された平成11年を以前から作成していた群とそれ以降の群とを比較する。

II 方法

(1) 調査対象

全国を10ブロックに分け、各地域から1都道府県(関東は3都県)を選択し、その都道府県に所在する知的障害養護学校(国立を除く)に設置されている小学部、中学部、高等部を対象とした。

(2) 調査期間

2004年3月~4月末日までの期間とした。

(3) 調査方法

調査用紙を知的障害養護学校の小学部、中学部、高等部に郵送し、それぞれ各学部から回答を得た。各学部とも回収率は70%であった。回答者は学部主事が最も多く、ついで教頭、教務主任、担当主任の順であった。

(4) 調査内容

個別の指導計画の作成有無、作成開始年度、書式、保護者との連携方法、保護者との連携意識、担当者ミーティングの有無、実態表の作成有無、作成様式、作成者、採用発達検査、長短期目標の期間、評価者、評価の保護者への伝達法、保護者の理解に対する認識、保護者の評価参加状況、個別の指導計画の問題点、今後の強化点である。

(5) 結果分析の観点

上記に示した調査内容を個別の指導計画の開始年度別に比較する。両群の質的な違いは、学習指導要領で個別の指導計画の作成が打ち出された平成11年以前から作成していたという意識の面と、個別の指導計画を作成して5年以上経過しているという経験の面がある。

III 結果

平成11年以前から作成していた群をA群とそれ以降の群をB群とする。

(1) 概要について

① 個別の指導計画の様式

小学部ではA群、B群ともに「タイムテーブルに設定しているほとんどすべての指導形態」が多いが、B群の方がA群よりも上回っていた。「領域や分野別」ではA群、「特定の指導形態」ではB群が上回っていた。

中学部ではA群、B群ともに「タイムテーブルに設定しているほとんどすべての指導形態」が最も高いが、B群では「領域や分野別」も多い。

高等部では、両群の傾向が類似していた。

表1 小学部における個別の指導計画の様式

	A 群	B 群
タイムテーブルに設定しているほとんどすべての指導形態	57.5	63.0
特定の指導形態	17.5	24.1
領域や分野別	25.0	16.7
その他	0.0	3.7

表2 中学部における個別の指導計画の様式

	A 群	B 群
タイムテーブルに設定しているほとんどすべての指導形態	65.1	46.9
特定の指導形態	25.6	30.6
領域や分野別	11.6	18.4
その他	2.3	6.1

表3 高等部における個別の指導計画の様式

	A 群	B 群
タイムテーブルに設定しているほとんどすべての指導形態	54.3	55.7
特定の指導形態	25.7	30.0
領域や分野別	11.4	12.6
その他	8.6	5.7

② 個別の指導計画の作成の参考先

小学部では、A群は「文献」、「教育センター等」が高く、B群では「他の養護学校」、「独自」が高かった。

中学部では、A群が「文献」が最も多いのに対し、B群では「他の養護学校」が最も多かった。

高等部ではA群、B群の傾向にほとんど違いはみら

れなかったが、「教育センター等」、A群の方が高かった。

表4 小学部における個別の指導計画の作成参考先

	A 群	B 群
教育センター等	30.0	18.5
文献	60.0	48.1
他の養護学校	32.5	50.0
独自	30.0	46.3

表5 中学部における個別の指導計画の作成参考先

	A 群	B 群
教育センター等	25.6	10.2
文献	44.2	46.9
他の養護学校	34.9	55.1
独自	41.9	34.7

表6 高等部における個別の指導計画の作成参考先

	A 群	B 群
教育センター等	40.0	22.9
文献	54.3	51.4
他の養護学校	51.4	42.9
独自	40.0	38.6

③ 長期目標と短期目標の期間の長さ

小学部において長期目標の長さでは、両群とも1年が多いが、3年ではA群が、1年ではB群が多い。短期目標の長さでは、両群とも学期が多いが、A群では1年が多かった。

中学部において 長期目標と短期目標の期間について、長期目標ではA・B群共に「1年」が最も多かった。短期目標ではやはりA・B群とも「学期」が最も多かった。長期・短期ともA群の方が「3年」「1年」の回答率が高かった。

高等部において長期目標・短期目標の期間の長さについて、長期目標はA群で「3年」と「1年」がほぼ同率であるのに対し、B群では圧倒的に「1年」が多い。短期はA・B群が同率で「学期」が最も高い割合を占めているが、次点はA群が「1年」であるのに対し、B群は「1年」と「その他」がほぼ同率だった。

表7 小学部における長期目標と短期目標の期間の長さ

		A 群	B 群
長期目標	6年	5.0	3.7
	3年	27.5	16.7
	1年	65.0	75.9
	その他	5.0	3.7
短期目標	3年	0.0	0.0
	1年	35.0	16.7
	学期	57.5	63.0
	1ヶ月	5.0	3.7
	単元	0.0	1.9
	その他	5.0	13.0

表8 中学部における長期目標と短期目標の期間の長さ

		A 群	B 群
長期目標	6年	0.0	0.0
	3年	30.2	6.1
	1年	65.1	91.8
	その他	2.3	4.7
短期目標	3年	0.0	0.0
	1年	25.6	10.2
	学期	58.1	75.5
	1ヶ月	4.7	0.0
	単元	4.7	2.0
	その他	9.3	14.3

表9 高等部における長期目標と短期目標の期間の長さ

		A 群	B 群
長期目標	6年	2.9	1.4
	3年	45.7	20.0
	1年	48.6	74.3
	その他	2.9	1.4
短期目標	3年	0.0	0.0
	1年	34.3	18.6
	学期	62.9	62.9
	1ヶ月	0.0	0.0
	単元	2.9	0.0
	その他	14.3	17.1

(2) 保護者との連携

① 保護者の願いの取り組み

小学部では、A・B群とも「懇談会」が9割以上を占め、次は僅差でA群は「連絡帳」、B群は「文書」が高かった。

中学部では、A・B群に違いはみられなかった。

高等部では、A・B群の傾向は同じだったが、すべての項目でA群の数値が高かった。

表10 小学部で保護者の願いについてどのような形式で聴取しているか。

	A 群	B 群
連絡帳に記入してもらう	50.0	42.6
個人懇談を行う	90.0	92.6
文書に記入してもらう	40.0	46.3
その他	20.0	16.7

表11 中学部で保護者の願いをどのような形式で聴取しているか。

	A 群	B 群
連絡帳に記入してもらう	46.5	49.0
個人懇談を行う	79.1	91.8
文書に記入してもらう	41.9	41.9
その他	16.3	18.4

表12 高等部で保護者の願いをどのような形式で聴取しているか。

	A 群	B 群
連絡帳に記入してもらう	62.9	48.6
個人懇談を行う	94.3	92.9
文書に記入してもらう	48.6	34.3
その他	14.3	12.9

② その取り組みで保護者の意図が十分くみ取れているか

小学部ではA・B群とも「だいたいできている」が最も多くを占めているが、「どちらとも言えない」の項目の数値はB群はA群の倍以上だった。

中学部では、A群は7割程度が「十分できている」「だいたいできている」だったが、B群は9割近くと高い数値を示した。

高等部では、A・B群に違いはみられなかった。

表13 小学部で現在の方法で保護者の意図が十分にくみ取れているか。

	A 群	B 群
十分できている	2.5	3.7
だいたいできている	85.0	74.1
どちらともいえない	7.5	20.4
あまりくみとられていない	2.5	3.7
全くくみ取れていない	0.0	0.0

表14 中学部で現在の方法で保護者の意図が十分にくみ取れているか。

	A 群	B 群
十分できている	4.7	10.2
だいたいできている	67.4	79.6
どちらともいえない	27.9	6.1
あまりくみとられていない	0.0	4.3
全くくみ取れていない	0.0	4.1

表15 高等部で現在の方法で保護者の意図が十分にくみ取れているか。

	A 群	B 群
十分できている	5.7	1.4
だいたいできている	68.6	65.7
どちらともいえない	25.7	28.6
あまりくみとられていない	0.0	4.3
全くくみ取れていない	0.0	0.0

③ 個別の指導計画への保護者の理解を深めるためにどのような取り組みを行っているか

小学部では、A・B群にほとんど違いはみられなかった。

中学部では、A群では「自由に参観してもらう」の項目がB群よりかなり高い数値を示していた。それ以外の項目でもA群の数値がほとんど高かった。

高等部では、A・B群に違いはみられなかった。

表16 小学部で保護者の理解を深めるために学校が働きかけていること

	A 群	B 群
自由に参観してもらう	39.5	40.8
授業参観日に参観してもらう	81.4	95.9
連絡帳で様子を伝える	95.3	89.8
学級通信で様子を伝える	76.7	81.6
その他	23.3	10.2

表17 中学部で保護者の理解を深めるために学校が働きかけていること

	A 群	B 群
自由に参観してもらう	54.3	37.1
授業参観日に参観してもらう	88.6	87.1
連絡帳で様子を伝える	91.4	85.7
学級通信で様子を伝える	68.6	70.0
その他	22.9	12.9

表18 高等部で保護者の理解を深めるために学校が働きかけていること

	A 群	B 群
自由に参観してもらう	52.5	48.1
授業参観日に参観してもらう	95.0	92.6
連絡帳で様子を伝える	90.0	96.3
学級通信で様子を伝える	85.0	7.0
その他	15.0	14.8

④ その方法で保護者がどの程度理解しているか
 小学部では、A群は7割以上が「だいたいできてる」と答えたのに対し、B群は5割を超えた程度であった。
 中学部では、B群では7割以上が「十分できている」「だいたいできている」と回答しているが、A群は5割余りで、「どちらともいえない」が4割を超えている。
 高等部では差が見られなかった。

表19 小学部において現在の方法で保護者の理解が十分に深められているか。

	A 群	B 群
十分できている	0.0	3.7
だいたいできている	77.5	57.4
どちらともいえない	22.5	33.3
あまりくみとられていない	0.0	3.7
全くくみ取れていない	0.0	0.0

表20 中学部において現在の方法で保護者の理解が十分に深められているか。

	A 群	B 群
十分できている	0.0	6.1
だいたいできている	53.5	67.3
どちらともいえない	41.9	20.4
あまりくみとられていない	2.3	6.1
全くくみ取れていない	0.0	0.0

表21 高等部において現在の方法で保護者の理解が十分に深められているか。

	A 群	B 群
十分できている	2.9	1.4
だいたいできている	45.7	51.4
どちらともいえない	42.9	38.6
あまりくみとられていない	5.7	8.6
全くくみ取れていない	0.0	0.0

⑤ 個別の指導計画について保護者のどのように説明を行ったか

小学部では、A・B群とも「懇談会で個別に行った」が5割余りで最も多く、A群では「その他」や「学年会」が続いた。B群では「特に説明は行わなかった」が2番目に多かった。

中学部では、B群では4分の1以上が「特に説明は行わなかった」と答えている。

高等部では、A・B群に違いはみられなかった。

表22 小学部での個別の指導計画について保護者への案内

		A 群	B 群
説明を行った	懇談会で個別に行った	52.5	59.2
	学年会で行った	17.5	3.7
	文書で行った	17.5	13.0
	その他	25.0	16.7
特に説明は行わなかった		12.5	25.9

表23 中学部での個別の指導計画について保護者への案内

		A 群	B 群
説明を行った	懇談会で個別に行った	41.9	44.9
	学年会で行った	14.0	6.1
	文書で行った	18.6	18.4
	その他	23.3	26.5
特に説明は行わなかった		18.6	26.5

表24 高等部での個別の指導計画について保護者への案内

		A 群	B 群
説明を行った	懇談会で個別に行った	40.0	54.3
	学年会で行った	11.4	10.0
	文書で行った	22.9	11.4
	その他	25.7	20.0
特に説明は行わなかった		22.9	22.9

⑥ 個別の指導計画というシステムについて保護者の理解をどれだけ得ているか

小学部では、A群は7割上が、「十分理解が得られた」「だいたい理解が得られた」と答えているが、B群は「どちらともいえない」「あまり理解を得られていない」で5割を占めた。

中学部では、A群では「だいたい理解が得られた」が6割以上を占めたのに対し、B群は4割余りで、「どちらとも言えない」「あまり得られていない」「全く得られていない」を合わせると、5割近くになる。

高等部では、A群では5割以上が「十分理解が得られた」「だいたい理解が得られた」と答えているのに対し、B群では「どちらともいえない」「あまり理解を得られていない」「全く理解を得られていない」で6割近くに上った。

表25 小学部での個別の指導計画のシステムに対する保護者の理解

	A 群	B 群
十分理解が得られた	2.5	7.4
だいたい理解が得られた	70.0	37.0
どちらともいえない	17.5	35.2
あまり理解を得られていない	7.5	14.8
全く理解を得られていない	0.0	0.0

表26 中学部での個別の指導計画のシステムに対する保護者の理解

	A 群	B 群
十分理解が得られた	0.0	2.0
だいたい理解が得られた	62.8	40.8
どちらともいえない	25.6	32.7
あまり理解を得られていない	9.3	10.2
全く理解を得られていない	0.0	4.1

表27 高等部での個別の指導計画のシステムに対する保護者の理解

	A 群	B 群
十分理解が得られた	2.9	0.0
だいたい理解が得られた	54.3	37.1
どちらともいえない	20.0	42.9
あまり理解を得られていない	11.4	12.9
全く理解を得られていない	5.7	4.3

⑦ 担当者ミーティングと保護者の参加について
小学部では、A・B群の傾向にほとんど差はみられなかった。

中学部では、ミーティングの有無ではA・B群に違いはみられなかったが、保護者の参加では若干ではあるがA群に参加がみられた。

高等部では、A群の方が高い数値を示した。

表28 小学部での担当者ミーティングの有無と保護者の参加

		A 群	B 群
担当者ミーティングについて	行っている	77.5	83.3
	行っていない	15.0	13.0
保護者の参加について	参加している	5.0	5.5
	参加していない	85.0	90.7

表29 中学部での担当者ミーティングの有無と保護者の参加

		A 群	B 群
担当者ミーティングについて	行っている	74.4	77.6
	行っていない	16.3	18.4
保護者の参加について	参加している	7.0	0.0
	参加していない	76.7	87.8

表30 高等部での担当者ミーティングの有無と保護者の参加

		A 群	B 群
担当者ミーティングについて	行っている	85.7	77.1
	行っていない	5.7	20.0
保護者の参加について	参加している	2.9	2.9
	参加していない	88.6	91.4

⑧ 今後保護者との連携を進めて行きたいかどうか
小学部、中学部、高等部のいずれもA・B群に違いはみられなかった。

表31 小学部での今後保護者との連携をどのように進めていきたいか

	A 群	B 群
もっと連携を深めていきたい	72.5	72.2
現状を維持したい	27.5	27.8
再検討したい	0.0	3.7
その他	0.0	0.0

表32 中学部での今後保護者との連携をどのように進めていきたいか

	A 群	B 群
もっと連携を深めていきたい	79.1	71.4
現状を維持したい	18.6	22.4
再検討したい	2.3	2.0
その他	0.0	2.0

表33 高等部での今後保護者との連携をどのように進めていきたいか

	A 群	B 群
もっと連携を深めていきたい	74.3	75.7
現状を維持したい	22.9	17.1
再検討したい	2.9	5.7
その他	0.0	4.3

(3) 評価

① 評価者

小学部では、A・B群とも「担任」が多くを占めたが、B群の「担当者」がA群よりも高かった。

中学部と高等部では、A・B群にほとんど違いはみられなかった。

表34 小学部での個別の指導計画の評価者

	A 群	B 群
担任	90.0	81.5
担当者	17.5	29.6
その他	7.5	1.9

表35 中学部での個別の指導計画の評価者

	A 群	B 群
担任	83.7	85.7
担当者	34.9	34.7
その他	11.6	4.1

表36 高等部での個別の指導計画の評価者

	A 群	B 群
担任	80.0	75.7
担当者	48.6	40.0
その他	11.4	8.6

② 個別の指導計画の評価を保護者に伝えているか
 小学部では、A・B群共に「通知表のみ」が最も多くを占めたが、「通知表のみ」の項目ではB群の方が高く、「イング」で4分の1を占めた。B群は「担当者」が次点だった。「通知表と別に評価表を通知している」の項目ではA群はB群の倍以上の数値だった。

表37 小学部での個別の指導計画の評価と通知表

	A 群	B 群
通知表と別に評価表を通知している	20.0	7.4
通知表のみ	65.0	74.1
その他	17.5	22.2

中学部では、A・B群とも「通知表のみ」が最も多くを占めたが、数値的にはB群の方が「通知表のみ」が多く、A群の方が「通知表と別に評価表を通知している」の割合が高かった。

表38 中学部での個別の指導計画の評価と通知表

	A 群	B 群
通知表と別に評価表を通知している	18.6	12.2
通知表のみ	65.1	77.6
その他	16.3	12.2

高等部では、A・B群に大きな違いはみられなかった。

表39 高等部での個別の指導計画の評価と通知表

	A 群	B 群
通知表と別に評価表を通知している	11.4	11.4
通知表のみ	74.3	72.9
その他	14.3	18.6

③ 個別の指導計画の内容評価

小学部では、A・B群の傾向に大きな違いはみられなかったが、内容の評価者はA群で「担当者ミーティング」の数値が高く、B群で「担当者」の数値が高かった。

表40 小学部での個別の指導計画の内容の評価と評価者

		A 群	B 群
個別の指導計画の内容の評価	行っている	87.5	90.7
	行っていない	7.5	9.3
誰が行っていますか	担任	57.5	57.4
	担当者	15.0	24.1
	担当者ミーティング	25.0	16.7
	その他	7.5	11.1

中学部では、A・B群とも「行っている」が9割前後と高い割合を示した。評価者については、どちらも「担当者」の数値が高かった。

表41 中学部での個別の指導計画の内容の評価と評価者

		A 群	B 群
個別の指導計画の内容の評価	行っている	93.0	89.8
	行っていない	7.0	10.2
誰が行っていますか	担任	48.8	65.3
	担当者	14.0	24.5
	担当者ミーティング	25.6	18.4
	その他	18.6	8.2

高等部では、A・B群とも8割以上が内容評価を行っていた。評価者はA・B群とも「担任」が最も高い割合を占めたが、B群は「担当者」も割合も高かった。A群は「担当者ミーティング」の項目でB群よりも高い数値を示した。

表42 高等部での個別の指導計画の内容の評価と評価者

		A 群	B 群
個別の指導計画の内容の評価	行っている	88.6	84.3
	行っていない	11.4	14.3
誰が行っていますか	担任	45.7	51.4
	担当者	25.7	37.1
	担当者ミーティング	17.1	11.4
	その他	25.7	8.6

④ 評価の頻度について

小学部では、A・B群とも「学期ごと」が最も多かったが、「1年ごと」の項目はA群の数値がかなり高かった。中学部と高等部ではA・B群に大きな違いはみられなかった。

表43 小学部での個別の指導計画の評価の頻度

	A 群	B 群
単元ごと	2.5	9.3
週ごと	0.0	3.7
月ごと	2.5	3.7
学期ごと	67.5	75.9
1年ごと	20.0	11.1
その他	17.5	14.8

表44 中学部での個別の指導計画の評価の頻度

	A 群	B 群
単元ごと	4.7	8.2
週ごと	2.3	2.0
月ごと	2.3	6.1
学期ごと	67.4	67.3
1年ごと	20.9	16.3
その他	16.3	14.3

表45 高等部での個別の指導計画の評価の頻度

	A 群	B 群
単元ごと	2.9	2.9
週ごと	2.9	0.0
月ごと	0.0	0.0
学期ごと	71.4	62.9
1年ごと	20.0	17.1
その他	25.7	14.3

- ⑤ 保護者が個別の指導計画とどのように関わっているか

小学部では、A・B群共に「懇談で口頭で伝える」が最も高い割合を占めたが、「評価表」「保護者も評価に参加」という項目でA群の数値が高かった。

中学部では、A・B群共に「懇談で口頭で」が最も高い割合を占めたが、A群では「評価表」の割合も高かった。

高等部では、A・B群共に「懇談で口頭で」が最も多くを占めたが、「評価表」の項目ではA群の数値が高かった。「特になし」もA群がB群よりも高かった。

表46 小学部での個別の指導計画と保護者の関わり

	A 群	B 群
評価表で評価を伝える	35.0	18.5
懇談で口頭で伝える	62.5	77.8
保護者にも評価に参加してもらう	12.5	5.5
特になし	10.0	13.0
その他	5.0	5.5

表47 中学部での個別の指導計画と保護者の関わり

	A 群	B 群
評価表で評価を伝える	27.9	16.3
懇談で口頭で伝える	55.8	77.6
保護者にも評価に参加してもらう	7.0	6.1
特になし	14.0	14.3
その他	4.7	4.1

表48 高等部での個別の指導計画と保護者の関わり

	A 群	B 群
評価表で評価を伝える	34.3	24.3
懇談で口頭で伝える	60.0	78.6
保護者にも評価に参加してもらう	5.7	2.9
特になし	17.1	12.9
その他	8.6	4.3

(4) 実態表について

① 実態表の作成の有無

小学部について、A群の方がB群より作成が10ポイント高かった。

中学部、高等部では、A群の方が作成の割合が高かった。

表49 小学部での実態表作成の有無

	A 群	B 群
はい	87.5	77.8
いいえ	12.5	22.2

表50 中学部での実態表作成の有無

	A 群	B 群
はい	83.7	75.5
いいえ	16.3	24.5

表51 高等部での実態表作成の有無

	A 群	B 群
はい	80.0	75.7
いいえ	20.0	24.3

② 実態表の様式

小学部、はA・B群共に「記述式」が多くを占めたが、A群の方がポイントが高く、B群は「チェック式との併用」でA群を上回った。

中学部、高等部では、A・B群にほとんど違いはみられなかった。

表52 小学部での実態表の様式について

	A 群	B 群
チェック方式	2.5	1.9
記述式	75.0	63.0
チェック式と記述式の併用	10.0	14.8
その他	0.0	1.9

表53 中学部での実態表の様式について

	A 群	B 群
チェック方式	4.7	2.0
記述式	65.1	65.3
チェック式と記述式の併用	11.6	8.2
その他	0.0	0.0

表54 高等部での実態表の様式について

	A 群	B 群
チェック方式	2.9	1.4
記述式	60.0	60.0
チェック式と記述式の併用	14.3	12.9
その他	2.9	4

③ 実態表の内容

小学部について、A・B群共に「領域別の発達段階に分けたもの」が最も高い割合を占めたが、A群では「その他」の項目も近い数値で高かった。

中学部では、B群では「領域別の発達段階に分けたもの」が圧倒的に高い割合を占めたが、A群では「領域別の発達段階に分けたもの」と「授業の形態ごとに段階に分けたもの」が同率で多数を占めた。

高等部では、A群は「その他」が最も高く、B群は「領域別の発達段階に分けたもの」が最も高い割合を占めた。A群では次いで「授業形態ごとに段階に分けたもの」が多かった。

表55 小学部での実態表の内容

	A 群	B 群
領域別の発達段階に分けたもの	35.0	35.2
指導計画を作成している授業の形態ごとに段階に分けたもの	20.0	14.8
家庭での生活地図やスケジュール表	22.5	16.7
その他	32.5	18.5

表56 中学部での実態表の内容

	A 群	B 群
領域別の発達段階に分けたもの	30. 2	36. 7
指導計画を作成している授業の形態ごとに段階に分けたもの	30. 2	16. 3
家庭での生活地図やスケジュール表	11. 6	10. 2
その他	23. 3	20. 4

表57 高等部での実態表の内容

	A 群	B 群
領域別の発達段階に分けたもの	25. 7	40. 0
指導計画を作成している授業の形態ごとに段階に分けたもの	28. 6	17. 1
家庭での生活地図やスケジュール表	17. 1	12. 9
その他	37. 1	18. 6

④ 実態表の見直しの頻度

小学部では、A・B群共に「1年ごと」が最も多くを占めたが、A群は「1学期ごと」の項目でB群よりも高かった。

中学部では、A・B群とも「1年ごと」が最も高い割合を占めたが、「1学期ごと」の項目ではA群の数値が高かった。

高等部では、A・B群共に「1年ごと」の項目が最も多くを占めたが、数値的にはA群で「1学期ごと」と近かった。

表58 小学部での実態表の見直しの頻度

	A 群	B 群
1学期ごとの見直し	17. 5	7. 4
1年ごとの見直し	60. 0	64. 8
3年ごとの見直し	0. 0	0. 0
その他	12. 5	5. 5

表59 中学部での実態表の見直しの頻度

	A 群	B 群
1学期ごとの見直し	20. 9	6. 1
1年ごとの見直し	53. 5	65. 3
3年ごとの見直し	2. 3	0. 0
その他	9. 3	6. 1

表60 高等部での実態表の見直しの頻度

	A 群	B 群
1学期ごとの見直し	28. 6	10. 0
1年ごとの見直し	34. 3	52. 9
3年ごとの見直し	0. 0	0. 0
その他	22. 9	11. 4

⑤ 発達検査の有無

小学部では、A・B群にほとんど違いはみられなかった。

中学部では、A群の方が作成で10ポイント近く上回った。

高等部では、A群で実施が高かったが、B群では「実施していない」が上回った。

表61 小学部での発達検査の有無

	A 群	B 群
はい	57. 5	57. 4
いいえ	30. 0	20. 4

表62 中学部での発達検査の有無

	A 群	B 群
はい	62. 8	53. 1
いいえ	20. 9	20. 4

表63 高等部での発達検査の有無

	A 群	B 群
はい	45. 7	32. 9
いいえ	34. 3	42. 9

⑥ 実態表の作成者

小学部，中学部ではA・B群共に「担任」が最も多かった。

高等部では、A・B群に大きな違いはみられなかった。

表64 小学部での実態表の作成者

	A 群	B 群
担任	75. 0	66. 7
担当者	15. 0	9. 3
その他	0. 0	3. 7

表65 中学部での実態表の作成者

	A 群	B 群
担任	69. 8	63. 3
担当者	18. 6	8. 2
その他	0. 0	2. 0

表66 高等部での実態表の作成者

	A 群	B 群
担任	71. 4	71. 4
担当者	17. 1	5. 7
その他	2. 9	1. 4

(5) 個別の指導計画の問題点

小学部では、A・B群共に「活用について」の項目が6割余りで最も高い割合だった。次に「担当者の事務負担の軽減」「保護者との連携」と続く点も同じだが、B群は次点の項目でも50%を超えるが、A群は次点で30%台に下がってしまう。各項目ともだいたいの数値はB群の方が高いが、「TTの問題」でA群はB群の倍以上の数値だった。

中学部ではA群とB群の傾向に大きな違いはみられなかった。

高等部では、個別の指導計画の問題点について、A・B群共に「担当者の事務負担の軽減」を始めとして、「活用について」「保護者との連携」が高い割合を示した。高等部ではA群が「カリキュラムとの関連」で数値が高かった。

表67 小学部での個別の指導計画の問題点

	A 群	B 群
カリキュラムとの関連	20.0	33.3
担当者の事務負担の軽減	32.5	50.0
TTの問題	25.0	11.1
保護者との連携	30.0	50.0
活用について	62.5	61.1
特になし	2.5	3.7
その他	15.0	20.4

表68 中学部での個別の指導計画の問題点

	A 群	B 群
カリキュラムとの関連	23.3	30.6
担当者の事務負担の軽減	34.9	49.0
TTの問題	20.9	20.4
保護者との連携	39.5	49.0
活用について	65.1	61.2
特になし	2.3	2.0
その他	16.3	8.2

表69 高等部での個別の指導計画の問題点

	A 群	B 群
カリキュラムとの関連	37.1	20.0
担当者の事務負担の軽減	51.4	62.9
TTの問題	20.0	22.9
保護者との連携	37.1	60.0
活用について	54.3	60.0
特になし	2.9	2.9
その他	11.4	10.0

(6) 個別の指導計画の今後の強化点

小学部では、A・B群共に「保護者との連携」「活用について」「書式について」の項目での数値が高い。A群では「TTの問題」が、B群では「カリキュラムとの関連」の数値の高さが注目される。

中学部では、上位を占めたのはA・B群共に「活用について」「書式について」「保護者との連携について」の3項目だった。それらに次いで、A群では「TTの問題」が、B群では「カリキュラムとの関連」が高い割合を占めた。

高等部では、A・B群共に「活用について」が最も高い割合で、「保護者との連携」「書式について」と続き、傾向に大きな違いはみられなかった。

表70 小学部での今後の強化点

	A 群	B 群
カリキュラムとの関連	20.0	40.7
担当者の事務負担の軽減	25.0	25.9
TTの問題	35.0	7.4
保護者との連携	50.0	55.5
活用について	62.5	68.5
書式について	42.5	57.4
その他	0.0	5.5

表71 中学部での今後の強化点

	A 群	B 群
カリキュラムとの関連	18.6	30.6
担当者の事務負担の軽減	27.9	28.6
TTの問題	30.2	22.4
保護者との連携	60.5	53.1
活用について	48.8	61.2
書式について	41.9	38.8
その他	7.0	12.2

表72 高等部での今後の強化点

	A 群	B 群
カリキュラムとの関連	28.6	22.9
担当者の事務負担の軽減	28.6	27.1
TTの問題	20.0	15.7
保護者との連携	48.6	54.3
活用について	57.1	61.4
書式について	31.4	38.6
その他	8.6	8.6

IV 考察

A群とB群の質的な違いは、学習指導要領で個別の指導計画の作成が打ち出された平成11年以前から作成していたという意識の面と個別の指導計画を作成して5年以上経過しているという経験の面がある。

(1) 概要について

個別の指導計画の様式については、学部で異なる結果が出た。学部ごとの比較の傾向よりもB群のどの学部も「特定の指導形態」の割合は多くなっている。

個別の指導計画の参考先は、A群が平均よりも「教育センター等」の数値が高く、B群は低い。このことから先駆的な取り組みであったA群においては、まだ参考となる他の養護学校が少なかったことが推測できる。

長期目標では、A群がどの学部においても「3年」の項目の数値が平均を大きく上回っている。同様に短期目標でも「1年」の数値が高い。反対にB群は平均値よりどちらの項目も数値が下回っていた。A群の方がB群よりも長期目標・短期目標とも長めに設定している学校が多い。

(2) 保護者との連携について

保護者の願いの聴取と意図の把握に対する教師の実感については、学部ごとで傾向が異なった。聴取方法において違いはみられなかったが、実感では小学部でA群の満足度が高い傾向にあり、中学部では、B群の方が満足度が高かった。高等部では違いは見られなかった。

個別の指導計画に対する保護者の理解を深めるために、学校が保護者に働きかけていることと、それにつ

いて保護者の理解をどれだけ得られているかの教師の実感について、働きかけにおいてはA・B群に大きな違いはみられなかった。実感については、小学部でA群が高い満足度を示しているのに対し、中学部・高等部ではB群の方が高く、A群は平均を大きく下回っている。

個別の指導計画について保護者にどのように説明を行ったかについて、「特に何も行わなかった」の項目で小学部・中学部ともにB群が高い数値を示している。また、A群の「学年会で行った」の数値は、B群や全体の平均値と比べても突出して高かった。高等部ではA群とB群の差はなかった。実感の面では各学部で共通しており、A群がいずれも高い満足度を示している。説明の部分でA・B群の違いがなかった高等部においてもA群が満足度で大きく上回っている。これは、時間の経過に伴い個別の指導計画というシステムがA群の学校の保護者に定着してきたためではないかと考えられる。

担当者ミーティングの有無と保護者の参加については、小学部・中学部でB群の方が行っている割合が高く、高等部ではA群の方が高かった。保護者の参加についてはB群の中学部が0%だった以外は、小学部も高等部もほぼ同程度の割合だった。

今後保護者とどのように連携を進めていきたいかについては、A・B群に大きな差はみられなかった。

（3）評価について

個別の指導計画の評価者は、A群の小学部で「担任」の数値が高く平均を上回っていたが、全体的にA・B群に大きな差はみられなかった。

個別の指導計画の評価を保護者に伝えているかについて、小学部と中学部ではA群の方が平均よりも高い割合で「通知票とは別に評価表を通知している」と答えた。高等部ではB群と違いはみられなかった。

個別の指導計画の内容評価について、A・B群どちらも高い水準で行っていることがわかったが、担任を除くとA群ではB群に比べ「担当者ミーティング」の数値が高い。小学部と中学部でそれが顕著である。

評価の頻度について、A・B群に大きな違いは見られなかったが、全体的な傾向としてA群のほうが長めに設定してあった。

個別の指導計画と保護者の関わりについて、A群では「評価表で評価を伝える」の割合が小・中・高等部とも平均値やB群より高かった。「保護者に参加してもらう」はやはりA群の方が高い傾向が見られる。

（4）実態表について

実態表の作成率は小・中・高等部ともA群の方が高かった。

実態表の様式については、A・B群にほとんど違い

は見られなかった。

実態表の内容では、A群の「授業形態ごとに段階に分けたもの」の数値が、小・中・高等部とも高い傾向にあった。また、A群で「その他」の項目の数値の高さも注目された。

実態表の見直しの頻度は、A群で小・中・高等部ともに「1学期ごとの見直し」の数値がB群よりも高かった。

発達検査の有無では、小学部でA・B群の数値がほとんど同じだったが、中学部、高等部では、A群の発達検査採用の割合が高かった。特に高等部では平均と異なり、採用の数値の方が採用していない数値より高かった。平均値で小学部の数値が高いことと考え合わせると、A群の方が発達検査の採用に積極的であるといえる。

実態表の作成者は、A群で小・中・高等部とも「担当者」の数値がB群と比べて高かった。

（5）個別の指導計画と今後の問題点

個別の指導計画の問題点として、小学部・中学部と高等部で傾向が異なる。全般的にはB群の方が問題点としている項目が多い。さらにB群では「担当者の事務負担の軽減」の数値が高い。また、小中学部では「カリキュラムとの関連」でB群の数値が高かった。

個別の指導計画の今後の強化点について、小中学部ではA群で「TTの問題」、B群で「カリキュラムとの関連」の項目で大きな違いが現れている。

B群においては、個別の指導計画の様式が6割以上「すべての指導形態」であった反面、A群に比べて「特定の指導形態」の割合も多かった。全国的な傾向として「特定」から「すべて」に移行しつつあり、それを検討する上でカリキュラムとどう関連付けていくかが当面の課題となっているのではないだろうか。A群の「TTの問題」についても、時間的な経過による次の課題ととらえられる。集団指導体制をとることの多い知的障害養護学校では、個別の指導計画に基づく授業の質を高めていくために当然出てくる課題であると思われる。

文献

- 1) 小濱真奈美・都築繁幸 2004 知的障害養護学校における個別の指導計画（1） 障害児教育方法学研究 第2巻第2号 15-25.
- 2) 小濱真奈美・都築繁幸 2005 知的障害養護学校における個別の指導計画（2） 障害児教育方法学研究 第3巻第1号 28-47.